

トピックス

2012年10月16日に野村コンファレンスプラザ日本橋（東京都中央区）において、会員会社のコンプライアンス担当者137名を対象に「第5回コンプライアンス研修会」が開催されました。会員会社のコンプライアンスの推進を図ることを目的に開催されており、2010年7月の第1回から数え今回で5回目を迎えます。今回は、会員会社2社（アステラス製薬、サノフィ）からヘルプライン（内部通報制度）の社内体制と運営についての報告と、池田耕一先生（社会と企業研究所 所長）による「不祥事発生のメカニズムとコンプライアンス担当者の役割」と題した講演がありました。

開会の挨拶

まずはじめに、製薬協仲谷専務理事から開会の挨拶があり、本研修会の趣旨や背景についての説明がありました。製薬協としては会員会社の不祥事を限りなくゼロに近づけるために、再発防止の取り組みを進めていくこと、また、2012年9月に実施した「プロモーション・コード」の一部改定や2013年4月実施予定で作業中のMR・研究開発部門・患者団体等をも対象にした「製薬協コード・オブ・プラクティス（仮称）」の作成を検討していることが報告されました。最後に、コンプライアンス向上のために会員各社のコンプライアンス担当者の努力を要請しました。

会員会社の報告

ヘルプラインの社内体制と運営について

アステラス製薬株式会社
法務・コンプライアンス部長
リージョナル・コンプライアンス・
オフィサー
（日本／アジア／オセアニア）
沖村 一徳 氏



アステラス製薬では、ヘルプラインの考え方として、①敷居は低く、間口は広く、②親切丁寧、③上司に相談できるものは上司に、④実名原則、匿名も可、

というこの4つを基本理念に掲げて、また、ヘルプライン体制としては、社内窓口2名および社外窓口の法律事務所と協力して推進していることを紹介しました。

通報案件としては、パワハラ・セクハラの問題が増えている傾向があり、その中で最近のパワハラ事例を紹介し、上司や部下の方の面談を通じ、問題を解決したこと等を述べました。

ホットライン（内部通報制度）の社内体制と運営について

サノフィ株式会社
渉外本部
プロモーションコード推進部
コンプライアンスアドバイザー
荒井 和男 氏



サノフィの日本法人では、グローバル・レベルで規定された方針や手順等で基本的に運営されている主旨を説明しました。社内体制については、アステラス製薬と同様な社内窓口（ホットライン）、社外窓口、ハラスメント窓口で対応しており、通報案件も月1、2件であることを紹介し、未然防止の観点から、2年に1回「社内アンケート」を実施し、集計結果から問題点を抽出し、コンプライアンス違反ゼロに向け活動していることを述べました。



会場風景

講演

不祥事発生メカニズムと コンプライアンス担当者の役割



社会と企業研究所 所長
立命館大学大学院経営管理研究科
客員教授 池田 耕一 先生

池田先生より、コンプライアンス担当者の心構えや役割について、企業での勤務経験を生かした説明があり、過去の企業不祥事の特徴についても「根っこ」の部分まで掘り下げた解説がありました。また、コンプライアンスが企業経営にとって重要な課題であり、マネジメントスキルでもあると認識できた講演会でした。

現代型企業不祥事の典型事例と特徴

1990年代以降に起きた現代型企業不祥事の特徴として、多くの人が知っていたこと、当たり前でしかも評価されていたことが、不祥事となり問題となっていることを指摘し、社会の尺度が変化し、行動のものさしが変わったことを認識すべきであると述べました。

企業不祥事多発の根っこはなにか

グローバル化の急速な進展に伴い、社会の意識（価値観）についてもグローバル・スタンダード化に向けた変化が起きていることから、変化をキーワードで表現すると①フリー：自由競争、②フェア：公正、③オープン：透明性、の3つであるとししました。このことにより、日本人のものさしに変化が起こり、公正性を求め、内部告発により多くの問題が顕著化し始め、リスク（マサカ）の急拡大が起きているこ

とを指摘し、この現象は10年前から起こり始め、「事前調整型社会」から「原則自由、事後制裁型社会」へと移行していると述べました。

改めて、コンプライアンスマネジメントとは

コンプライアンスの意味として、一般的には「法令順守」であるが、今では「社会の期待に沿う業務遂行」へと変化していると、コンプライアンスマネジメントの源流は、「米国連邦量刑ガイドライン」であると述べました。

コンプライアンス担当者の役割を考える

基本認識・姿勢として、「不祥事はなくならない、減らすことは可能である」の心構えで、「不祥事を起こしたときの影響が大きな立場の人から順番に取り組むことが必要である」と述べました。

まとめ

グローバル化の進展の中で、米国型不祥事の増加が予想され、コンプライアンスがますます重要になることを挙げ、コンプライアンス担当者としては、社会の変化を敏感に感じることや、仕事の方法を常に改善・改革することが重要であると述べました。

閉会の挨拶

池田先生の講演に対して新川実務委員長より謝辞があり、続いて閉会の挨拶がありました。

挨拶では、各社が対応に苦慮している「不祥事発生メカニズム」「コンプライアンス担当者の役割」を取り上げてもらい、いくつかの貴重なヒントが得られた旨の感想が述べられました。また、会員会社においては、企業倫理やコンプライアンス意識の向上等の研修会を実施するとともに、コンプライアンス推進に努力する必要があることを確認して、本研修会を終えました。

(コンプライアンス委員会 ワーキングチーム
柴田由起夫)